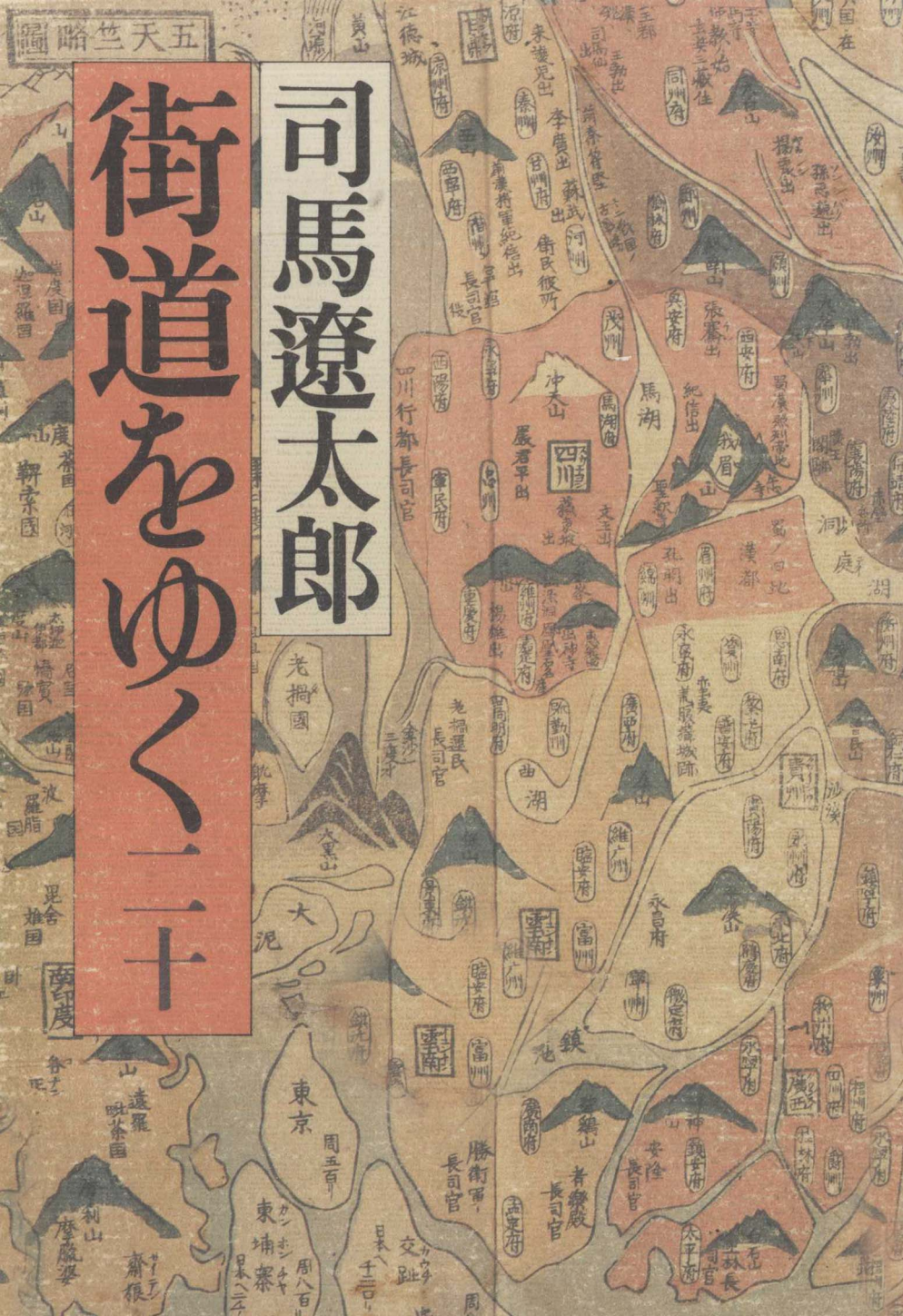




司馬遼太郎

街道をゆく二十

街道をゆく
二十
司馬遼太郎

朝日新聞社

昭和五十八年一月二十日 第一刷発行

街道をゆく 二十

定価 一二〇〇円

著者 司馬遼太郎

発行者 初山有恒

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地 五―三―二
電話 〇三―五四五―〇一三一(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇―一七三〇

©司馬遼太郎 一九八三年

0326-254960-0042
Printed in Japan

街道をゆく

二十

本書には「週刊朝日」昭和五十七年三月十九日号・連載第五百三十二回から、同年九月三日号・第五百五十六回までを収録。

目次

はるかな地	7
中国・蜀のみち	
入蜀	13
蜀人の清潔	27
コンニャク問答	41

成都散策

55

風薫る海椒

69

鬼の肉

83

古代のダム

97

灌県の農家

109

孔明と紙

123

陳寿と孔明

137

孔明の政治

151

葛巾の像

163

浣花村

177

竹の園

191

中国・雲南のみち

古代西南夷

205

銀樺の町

219

睡美人

233

滇池登高記

249

大航海者

265

昆明の昼寝

279

人間の集団のおそろしさ

295

イ族の村

309

石造ア―千橋

張飛の図

昆明路傍

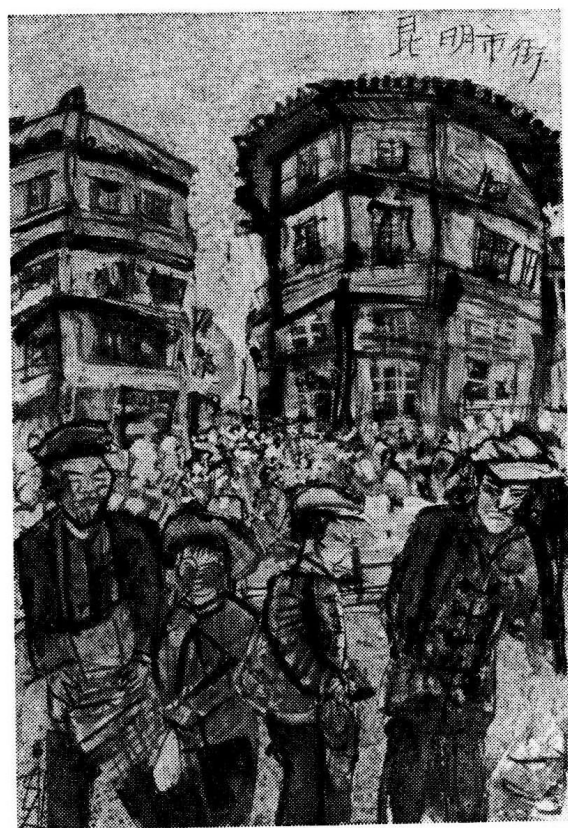
323

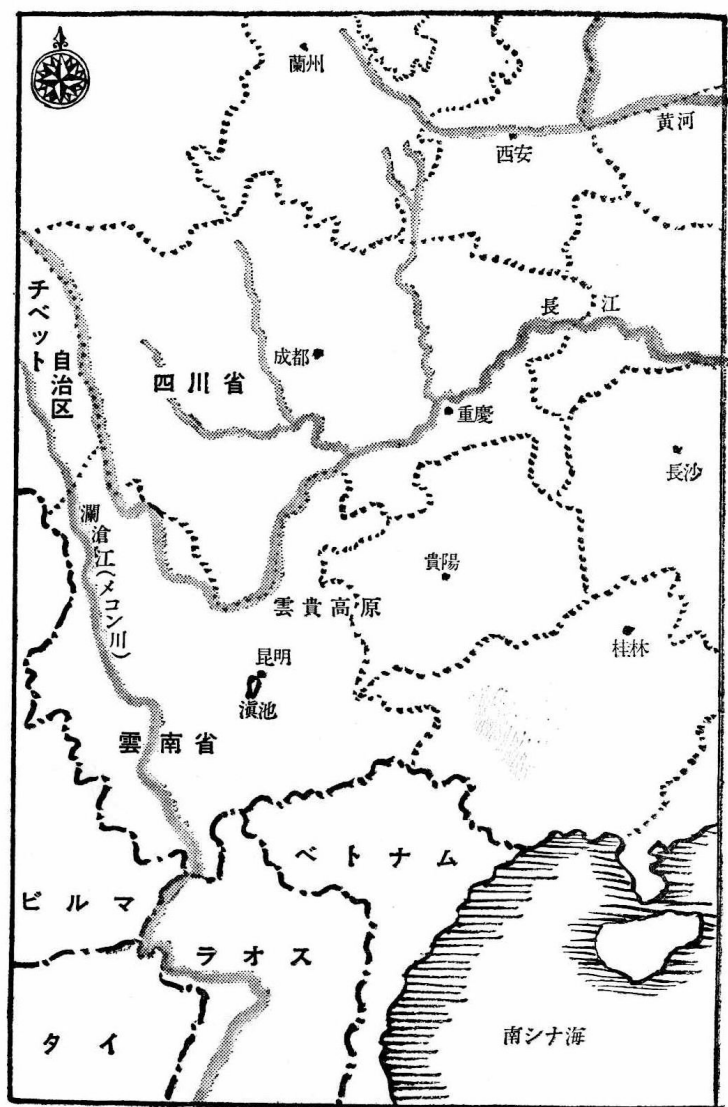
337

351

題字 棟方志功
え 須田剋太
装幀 原 弘
地図 熊谷博人

はるか昔地





鉄や鋤などの鉄板のふちに赤み、そや白み、そで壁をきずき、その中央に肉やねぎを置く。煮えるにつれて赤白のみ、その壁がだんだん溶け、中身がほよい味になってゆく。

中国文明という普遍性の高い文明が成立してゆく事情というのは、右のような料理法(?)に似ているのではないかいつも思っている。

極端に言えば、もともと漢民族というものは存在しなかった。高度の土器生産に長じた民族が最初にこの可耕性の高い大陸にやってきて住みつき、次いで青銅冶金に長じた民族がきて、殷帝国をつくり、さらにそれよりも冶金能力は粗笨ながら政治・軍事という集団統御に長じた民族がやってきて、周帝国をつくったと見たい。ついで鉄をつくる能力をもった民族がやってきて、この大陸の農業生産を飛躍させ、新興地主の乱立する乱世のなかで古代的生産社会が崩された。

次いで、西方に発生した遊牧文明が東に移って、中国大陆の周辺を大きくとりかこむが、これらとはべつに長江(揚子江)水系にあって稲作を興した民族が、大陸の文明に多様性をあたえてゆく。

周史の騎馬民族が、古代中原のひとびとに動物の利用法を教えた。たとえば車戦しか知らなかった中原の文化に対し、じかに馬の背に騎つて人馬一体で運動する方法を教え、革靴を教

え、軍装としてレイン・コート風の上着とズボンを教え、また肉の貯蔵法や食い方を教えた。
たとえば、

「羌」

という民族が、いまの中国領シルク・ロードのあたりに牧畜していて、次第に中原の文化を身につけた。孔子が儒教の範とした周という古代王朝も、その祖の一派は羌であったかと思われるし、中国大陸を最初に統一した秦もまたその祖は羌であったろうと考えるほうが自然である。

秦のあと、漢が興る。

漢は、劉邦（紀元前二四七〜同一九五）という現在の江蘇省沛県（はいいん）の農家のうまれの人物をかつぐことによって興された。沛は稲作圏の北限でありつつも麦作圏の南限でもあって、いわば両文化が混雑（こんさう）している地帯であった。

長江流域の稲作圏は、当時、楚とよばれた。楚を代表する当時の大親分は項羽（紀元前三二三〜同二〇二）であった。項羽は秦を倒すと、邪魔者の劉邦を遠く漢中へやってそこに封じた。

「漢中」

というのは、いまも地名がある。陝西省南部の山間の小さな野で、蜀（しよく）（四川省）へ登ってゆく棧道（さんどう）の一つの出発点でもある。秦嶺山脈と大巴山脈の中間に位置し、想像するに、当時、中原（ちゆうげん）

の文化はさほどには入っていなかったにちがいない。むしろ、少数民族のほうが多かったかとおもえる。この漢中の「漢」が、かれの興す帝国の名称になっただけでなく、この大陸の普遍的な文化にくるまれているすべてのひとびとをさす民族呼称にもなるのである。

漢中からよじのぼる蜀という広大な天地は、春秋・戦国のころまでは、漢民族圏ではなかった。漢民族にとってまったく異民族の地だが、農耕は営まれていた。

それどころか、長江の上流になるために、おそらく中国における古代稲作のふるい展開地のひとつであつたろうし、そのにない手は、いまでも四川省に多く住む古代タイ語系のひとびとだけに相違ない。

秦がこの地に手をつけたが、それよりも大規模にこの地に漢民族が進出するのは、漢中王時代の劉邦の時代である。劉邦は項羽と対抗するために蜀と巴（いずれも四川省）という肥沃な農業生産力を手に入れたのである。

その南に接する雲南省になると、完全に中国の版図に組み入れられたのは、十四世紀、漢民族にとって異民族王朝である元のときであつた。元の武力とその異常な征服欲をもってしなれば、この僻遠南蛮の地が征せられなかった。というよりわざわざ長征軍を送るなどという酔

狂なことを思いたつ王朝がなかったのであろう。

雲南省には、いまなお七百万人の少数民族が住んでいる。その生産や暮らし方という伝統文化はどこか日本に似ていて、ときに縄文文化の一派はこの地方とどこかでつながっていたのではないかという想像もなされる。そのくせ、考古学をふくめた文化人類学の雲南研究が、日中ともに組織的におこなわれているとはいえない。

私どもは江南の旅を終えたあと、上海の飛行場へゆき、まず蜀の地へゆくことにした。

入

蜀

中国・蜀のみち
一

